

平成 27 年度日本血液事業学会事業報告

◎会員数 平成 28 年 3 月 31 日現在

A 会員	7,088 名
B 会員	50 名
合 計	7,138 名

◎学会機関誌「血液事業」の発行

第 38 卷第 1 号 2015 年 5 月	7,390 部
第 38 卷第 2 号 2015 年 8 月	7,580 部 (抄録集)
第 38 卷第 3 号 2015 年 11 月	7,390 部
第 38 卷第 4 号 2016 年 2 月	7,390 部
合 計	29,750 部

◎第 39 回日本血液事業学会総会

第 39 回日本血液事業学会総会概要

総会事務局 日本赤十字社近畿ブロック血液センター

第 39 回日本血液事業学会総会（総会長：日本赤十字社近畿ブロック血液センター 河 敬世顧問）は、平成 27 年 10 月 4 日（日）から 6 日（火）までの 3 日間に亘り、大阪国際会議場を会場として開催しました。

本総会のテーマを「ふたたび輝く笑顔のために」と掲げ、安全な血液製剤の安定的な供給体制を確立するため、患者、ドナー、家族、血液事業に係わる全ての関係者をつなぐための方策を立てる機会となるよう企画しました。

また、市民公開講座「再生医療の現状と将来展望」および若年層の献血推進を趣旨とした参加型コンテスト「献血甲子園」を開催し、本学会会員だけでなく、一般市民の方々にも血液事業を身近に感じていただくよう注力しました。

「献血甲子園」では、（1）若年層を対象にした啓発広報・献血推進の取り組み、（2）鉄欠乏性貧血対策のための鉄人バランス弁当コンテスト、（3）献血川柳コンテスト、（4）献血大喜利コンテストの 4 部門の企画について、事前に一般市民から応募のあった約 4,000 点の中から事前に優秀作品を選出し、表彰しました。また、献血クイズ大会を催し、年齢や職種などの垣根を越えて集まった約 1,000 名の参加者が血液事業への理解を深める機会となりました。

その他のプログラムの概要は次のとおりです。

特別講演は 2 題、特別講演 1 「緒方洪庵の種痘事業」演者：村田 路人（大阪大学大学院文学研究科）、特別講演 2 「エピジェネティクス入門—その概念から応用まで—」演者：仲野 徹（大阪大学大学院医学系研究科病理学）を開催しました。

シンポジウムは 4 題、シンポジウム 1 「輸血感染症とその安全対策」、シンポジウム 2 「血液事業の将来展望」、シンポジウム 3 「採血効率への取組み」、シンポジウム 4 「非溶血性輸血副作用」を開催しました。

ワークショップは 6 題、ワークショップ 1 「血液事業における今後の搬送・供給体制を考える」、ワークショップ 2 「稀な血液の検査体制と供給体制」、ワークショップ 3 「採血副作用」、ワーク

ショッピング4「MR～新たな船出を迎えて～」、ワークショップ5「さい帯血バンク事業の現状と今後の展望」、ワークショップ6「新たな危機管理体制をめざして～あの日を忘れないために～」を開催しました。

教育講演は8題、教育講演1「食生活と肝機能異常」演者：田守 昭博（大阪市立大学医学部附属病院）、教育講演2「情報があふれる社会の中で、人を動かす力をどう生み出すか」演者：西村 康朗（株式会社博報堂）、教育講演3「ボランティア意識の深層：脳活動からの理解」演者：泰羅 雅登（東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科）、教育講演4「ホスピタル・プレイ・スペシャリストとの協働から生まれる可能性 日本におけるこれまでの取り組みを踏まえて」演者：松平 千佳（静岡県立大学短期大学部／NPO法人日本ホスピタルプレイ協会）、教育講演5「新興・再興感染症と血液製剤の感染症因子低減化」演者：佐竹 正博（日本赤十字社血液事業本部中央血液研究所）、教育講演6「WT1ペプチドがんワクチン」演者：杉山 治夫（大阪大学大学院医学研究科）、教育講演7「食の安全・安心への取組み～キリンの品質保証～」演者：高橋 裕二（キリン株式会社品質保証部）、教育講演8「神経障害（採血副作用）」演者：稻田 有史（稻田病院）を開催しました。

特別企画1「ブロック血液センター所長推薦優秀演題」では、日本赤十字社各ブロック血液センター所長から推薦のあった合計7題を「ブロック血液センター所長推薦優秀演題」とし、総会長および日本血液センター連盟会長が7名の演者を表彰しました。

その他、特別企画2「ふたたび輝く笑顔のために」、特別企画3「地方からの挑戦」では、一般演題の中から、それぞれのテーマに合った演題を選択し、シンポジウム形式で講演会を開催しました。

共催セミナーは12題を開催しました。モーニングセミナーとして、共催セミナー1「HTLV-1とATLの最新情報」演者：宇都宮 興（公益財団法人慈愛会今村病院分院）、共催セミナー2「糖尿病の治療と合併症に対する新たな展開」演者：矢部 大介（関西電力病院 糖尿病・代謝・内分泌センター）、共催セミナー8「HEV NATスクリーニングの現状」演者：坂田 秀勝（日本赤十字社北海道ブロック血液センター）「地域センターの品質情報係がドラッカーのマネージメントを読んだら」演者：吉原 淳（島根県赤十字血液センター）、共催セミナー9「臍帯血と臍帯を用いた新規細胞治療開発」演者：長村 登紀子（東京大学医科学研究所セルプロセッシング・輸血部）の4題を設けました。ランチョンセミナーとして、共催セミナー3「B型肝炎 ユニバーサルワクチネーションへの道」演者：須磨崎 亮（筑波大学医学医療系小児科）、共催セミナー4「自動分析器を用いた血液型検査と不規則抗体スクリーニング」演者：矢部 隆一（日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター）、共催セミナー5「18Gの採血針」演者：松崎 浩史（東京都赤十字血液センター）共催セミナー10「B型肝炎の再活性化：輸血後肝炎と誤解されてきた医原病」演者：持田 智（埼玉医科大学消化器内科・肝臓内科）、共催セミナー11「台湾人の血液型（Blood groups in Taiwan）～アジアにおける輸血を探る～」演者：林 媽利（馬偕紀念醫院〔台湾〕）、共催セミナー12「クリニクラウンがかける笑顔の魔法」演者：石井 裕子（NPO法人日本クリニクラウン協会）の6題を設けました。イブニングセミナーとして、共催セミナー6「抗HBs人免疫グロブリンの国内自給への方策／HBIGを用いたB型肝炎治療の現状とHBワクチンプログラムによる原料血漿の収集について」演者：紀野 修一（日本赤十字社北海道ブロック血液センター兼日本赤十字社血液事業本部）「遺伝子組換え抗HBs人免疫グロブリンの開発」演者：古田 里佳（日本赤十字社近畿ブロック血液センター）、共催セミナー7「Hb-vesicles（赤血球代替物）の有用性と開発の状況」演者：酒井 宏水（奈良県立医科大学医学部化学教室）の2題を設けました。

一般演題は324題（口演119題、ポスター205題）が発表され、各会場で熱心な討論が展開され

ました。また、企業展示は39社が出展されました。

期間中、総会には1,150名(事前登録961名、当日受付189名)、第2日目にリーガロイヤルホテル大阪において開催した会員交見会には737名と、全国から多数の方々が参加されました。

また、第1日目に学会編集委員会、学会役員会、学会評議会を、第2日目に血液センター連盟役員会を開催しました。

平成27年度日本血液事業学会収支決算書

(単位：円)

収 入		支 出	
1. 会費収入	53,837,000	1. 総会費	33,686,098
		2. 役員会費	86,116
2. 補助金収入	0	3. 評議員会費	0
		4. 編集委員会費	0
3. 購読料収入	259,000	5. 印刷製本費	18,199,809
		6. 職員費	2,279,286
4. その他収入	29,784,167	7. 旅 費	230,000
		8. 通信運搬費	1,797,566
5. 利子収入	6,464	9. 消耗品費	23,692
		10. 印刷費	0
6. 雑収入	24,414	11. 雜 費	864
		12. 租税公課	6,390,500
7. 前年度繰越額	22,468,589		
計	106,379,634	計	62,693,931

収 支 差 引 額
(翌年度へ繰越)

43,685,703円

前記決算のとおり相違ありません。

平成28年3月31日

日本血液事業学会
会長 高本 滋

前記決算は正確であることを認めます。

平成28年8月18日

日本血液事業学会
会計監事 稲葉頌一

会計監事 浅井隆善

平成29年度日本血液事業学会事業計画

◎会員数

A会員	6,950名
B会員	50名
合 計	7,000名

◎学会機関紙「血液事業」の発行

第40巻第1号	2017年 5月	7,400部
第40巻第2号	2017年 8月	7,600部 (抄録集)
第40巻第3号	2017年 11月	7,400部
第40巻第4号	2018年 2月	7,400部
合 計		29,800部 発行

第41回(平成29年度)日本血液事業学会総会長の選出

総会長　入田和男先生
(日本赤十字社九州ブロック血液センター所長)

(規約第10条第3号)

総会の開催に当っては会長が評議員会にはかって総会長を委嘱する。

第41回日本血液事業学会総会(総会長:入田 和男先生 日本赤十字社九州ブロック血液センター所長)は、2017年(平成29年)10月31日(火)～11月2日(木)に福岡国際会議場(福岡市)を会場として開催する。

平成29年度日本血液事業学会収支予算書

(単位：円)

収 入		支 出	
1. 会費収入	51,500,000	1. 総会費	33,800,000
		2. 役員会費	87,000
2. その他収入	16,500,000	3. 評議員会費	0
		4. 編集委員会費	0
3. 購読料収入	240,000	5. 印刷製本費	20,860,000
		6. 職員費	2,290,000
4. 雜収入	20,000	7. 旅 費	392,000
		8. 通信運搬費	1,800,000
5. 利子収入	6,000	9. 消耗品費	24,000
		10. 印刷費	0
6. 補助金収入	0	11. 雜 費	1,000
		12. 租税公課	8,890,000
		13. 予備費 ※	10,122,000
計	68,266,000	計	78,266,000

収支差引額	△10,000,000
前年度繰越金	43,685,703
次年度繰越金	33,685,703

※予備費のうち10,000,000円は平成28年10月3日
第40回日本血液事業学会総会役員会・評議員会でホ
ームページ関連予算として当日承認されたもので
ある

第42回(平成30年度)日本血液事業学会総会開催地

日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター管内

第41回(平成29年度)日本血液事業学会総会長の選出(案)

総会長 入田 和男 先生
(日本赤十字社九州ブロック血液センター所長)

(規約第10条第3号)

総会の開催に当っては会長が評議員会にはかって総会長を委嘱する。

第41回日本血液事業学会総会(総会長:入田 和男先生 日本赤十字社九州ブロック血液センター所長)は、2017年(平成29年)10月31日(火)～11月2日(木)に福岡国際会議場(福岡市)を会場として開催する。

日本血液事業学会名誉会員の推薦

河 敬世 先生(前 日本赤十字社近畿ブロック血液センター所長)
清川 博之 先生(前 日本赤十字社九州ブロック血液センター所長)
土肥 博雄 先生(前 日本赤十字社中四国ブロック血液センター所長)
(平成28年10月3日評議員会において承認)

改善課題血液事業本部長賞(仮称)

改善課題血液事業本部長賞(仮称)が新設され、平成29年10月31日～11月2日に開催される第41回日本血液事業学会総会において発表および表彰を行うことが役員会並びに評議員会にて承認された。

編集委員の選出

【新委員(追加)】

椿 和央 先生(日本赤十字社中四国ブロック血液センター所長)
入田 和男 先生(日本赤十字社九州ブロック血液センター所長)
谷 慶彦 先生(大阪府赤十字血液センター所長)
(編集委員会運営要綱第4条第2号)

編集委員は、日本血液事業学会役員会及び評議員の推薦により会長が委嘱する。

日本血液事業学会総会開催状況

回	開催年月	開催場所	総会長	総会事務局
1	1977(S.52). 7	宮城県(仙台市)	所長 千葉修次郎	宮城県赤十字血液センター
2	1978(S.53). 6	東京都(渋谷区)	所長 大林 静男	日本赤十字社中央血液センター
3	1979(S.54). 7	神奈川県(横浜市)	所長 岩田 昌一	神奈川県赤十字血液センター
4	1980(S.55). 7	兵庫県(神戸市)	所長 今井 英世	兵庫県赤十字血液センター
5	1981(S.56). 7	岡山県(岡山市)	所長 西崎太計志	岡山県赤十字血液センター
6	1982(S.57). 7	静岡県(静岡市)	所長 野口 正輝	静岡県赤十字血液センター
7	1983(S.58). 9	福岡県(福岡市)	所長 吉成 章之	福岡県赤十字血液センター
8	1984(S.59). 9	大阪府(大阪市)	所長 田中 正好	大阪府赤十字血液センター
9	1985(S.60). 9	京都府(京都市)	所長 細井 武光	京都府赤十字血液センター
10	1986(S.61). 9	宮城県(仙台市)	所長 赤石 英	宮城県赤十字血液センター
11	1987(S.62). 9	愛知県(名古屋市)	所長 福田 常男	愛知県赤十字血液センター
12	1988(S.63). 9	広島県(広島市)	所長 宗像 寿子	広島県赤十字血液センター
13	1989(H. 1). 10	熊本県(熊本市)	代行 前田 義章	熊本県赤十字血液センター
14	1990(H. 2). 9	福島県(福島市)	所長 渡辺 岩雄	福島県赤十字血液センター
15	1991(H. 3). 9	奈良県(奈良市)	所長 市場 邦通	奈良県赤十字血液センター
16	1992(H. 4). 9	東京都(北区)	所長 天木 一太	東京都赤十字血液センター
17	1993(H. 5). 9	北海道(札幌市)	所長 関口 定美	北海道赤十字血液センター
18	1994(H. 6). 9	石川県(金沢市)	所長 大川 力	石川県赤十字血液センター
19	1995(H. 7). 9	大阪府(大阪市)	北大阪所長 小川 昌昭	大阪府赤十字血液センター
20	1996(H. 8). 3	千葉県(千葉市)	所長 十字 猛夫	日本赤十字社中央血液センター
21	1997(H. 9). 9	宮崎県(宮崎市)	所長 新宮 世三	宮崎県赤十字血液センター
22	1998(H.10). 9	北海道(旭川市)	釧路所長 中澤 英輔	北海道赤十字血液センター
23	1999(H.11). 9	新潟県(新潟市)	所長 小島 健一	新潟県赤十字血液センター
24	2000(H.12). 9	岡山県(倉敷市)	所長 喜多嶋康一	岡山県赤十字血液センター
25	2001(H.13). 9	愛知県(名古屋市)	所長 小澤 和郎	愛知県赤十字血液センター
26	2002(H.14). 9	福岡県(福岡市)	所長 前田 義章	福岡県赤十字血液センター
27	2003(H.15). 9	京都府(京都市)	所長 横山 繁樹	京都府赤十字血液センター
28	2004(H.16). 9	神奈川県(横浜市)	所長 謙訪 環三	神奈川県赤十字血液センター
29	2005(H.17). 10	宮城県(仙台市)	所長 舟山 完一	宮城県赤十字血液センター
30	2006(H.18). 10	北海道(札幌市)	所長 池田 久實	北海道赤十字血液センター
31	2007(H.19). 10	香川県(高松市)	所長 内田 立身	香川県赤十字血液センター
32	2008(H.20). 10	大阪府(大阪市)	所長 柴田 弘俊	大阪府赤十字血液センター
33	2009(H.21). 11	愛知県(名古屋市)	名誉所長 神谷 忠	愛知県赤十字血液センター
34	2010(H.22). 9	福岡県(福岡市)	所長 清川 博之	福岡県赤十字血液センター
35	2011(H.23). 10	埼玉県(さいたま市)	所長 南 陸彦	埼玉県赤十字血液センター
36	2012(H.24). 10	宮城県(仙台市)	所長 伊藤 孝	宮城県赤十字血液センター
37	2013(H.25). 10	北海道(札幌市)	所長 高本 滋	北海道ブロック血液センター
38	2014(H.26). 10	広島県(広島市)	所長 土肥 博雄	中四国ブロック血液センター
39	2015(H.27). 10	大阪府(大阪市)	所長 河 敬世	近畿ブロック血液センター
40	2016(H.28). 10	愛知県(名古屋市)	所長 高松 純樹	東海北陸ブロック血液センター
41	2017(H.29). 10	福岡県(福岡市)	所長 入田 和男	九州ブロック血液センター

日本血液事業学会名誉会員

池 田 久 實	白 戸 恒 勝
伊 藤 孝	田 中 明
内 田 立 身	土 岐 博 信
大 川 力	西 本 至
大 竹 一 生	船 本 剛 朗
小 澤 和 郎	前 田 義 章
神 谷 忠	南 瞳 彦
草 刈 隆	宗 像 寿 子
敷 島 宏 和	湯 浅 晋 治
柴 田 弘 俊	渡 辺 岩 雄
十 字 猛 夫	

(順不同)

日本血液事業学会役員

会 長	高 本 滋	(日本赤十字社北海道ブロック血液センター所長)
常任幹事	中 西 英 夫	(日本赤十字社血液事業本部副本部長)
幹 事	永 井 正	(日本赤十字社血液事業本部中央血液研究所副所長)
	高 本 滋	(日本赤十字社北海道ブロック血液センター所長)
	山 本 哲	(北海道赤十字血液センター所長)
	清 水 博	(日本赤十字社東北ブロック血液センター所長)
	面 川 進	(秋田県赤十字血液センター所長)
	中 島 一 格	(日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター所長)
	加 藤 恒 生	(東京都赤十字血液センター所長)
	高 松 純 樹	(日本赤十字社東海北陸ブロック血液センター所長)
	大 西 一 功	(愛知県赤十字血液センター所長)
	藤 村 吉 博	(日本赤十字社近畿ブロック血液センター所長)
	谷 康 彦	(大阪府赤十字血液センター所長)
	椿 和 央	(日本赤十字社中四国ブロック血液センター所長)
	池 田 和 真	(岡山県赤十字血液センター所長)
	入 田 和 男	(日本赤十字社九州ブロック血液センター所長)
	松 崎 浩 史	(福岡県赤十字血液センター所長)
会計監事	稻 葉 頌 一	(日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター副所長)
	浅 井 隆 善	(千葉県赤十字血液センター所長)

日本血液事業学会評議員

佐竹 正博（日本赤十字社血液事業本部中央血液研究所所長）
高本 滋（日本赤十字社北海道ブロック血液センター所長）
山本 哲（北海道赤十字血液センター所長）
清水 博（日本赤十字社東北ブロック血液センター所長）
柴崎 至（青森県赤十字血液センター所長）
中居 賢司（岩手県赤十字血液センター所長）
中川 國利（宮城県赤十字血液センター所長）
面川 進（秋田県赤十字血液センター所長）
渡辺 眞史（山形県赤十字血液センター所長）
今野 金裕（福島県赤十字血液センター所長）
稻葉 頌一（日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター副所長）
佐藤 純一（茨城県赤十字血液センター所長）
阿久津 美百生（栃木県赤十字血液センター所長）
林 泰秀（群馬県赤十字血液センター所長）
芝池 伸彰（埼玉県赤十字血液センター所長）
浅井 隆善（千葉県赤十字血液センター所長）
西田 一雄（東京都赤十字血液センター副所長）
藤崎 清道（神奈川県赤十字血液センター所長）
布施 一郎（新潟県赤十字血液センター所長）
田中 均（山梨県赤十字血液センター所長）
佐藤 博行（長野県赤十字血液センター所長）
高松 純樹（日本赤十字社東海北陸ブロック血液センター所長）
横川 博（富山県赤十字血液センター所長）
塩原 信太郎（石川県赤十字血液センター所長）
豊岡 重剛（福井県赤十字血液センター所長）
林 勝知（岐阜県赤十字血液センター所長）
南澤 孝夫（静岡県赤十字血液センター所長）
大西 一功（愛知県赤十字血液センター所長）
岡田 昌彦（三重県赤十字血液センター所長）
藤村 吉博（日本赤十字社近畿ブロック血液センター所長）
小笠 宏（滋賀県赤十字血液センター所長）
辻 肇（京都府赤十字血液センター所長）
谷 慶彦（大阪府赤十字血液センター所長）
三木 均（兵庫県赤十字血液センター所長）
高橋 幸博（奈良県赤十字血液センター所長）
田村 康一（和歌山県赤十字血液センター所長）
椿 和央（日本赤十字社中四国ブロック血液センター所長）
佐々木 信之（鳥取県赤十字血液センター所長）
前迫 直久（島根県赤十字血液センター所長）
池田 和眞（岡山県赤十字血液センター所長）

山 本 昌 弘（広島県赤十字血液センター所長）
藤 井 輝 正（山口県赤十字血液センター所長）
浦 野 芳 夫（徳島県赤十字血液センター所長）
本 田 豊 彦（香川県赤十字血液センター所長）
芦 原 俊 昭（愛媛県赤十字血液センター所長）
河 野 威（高知県赤十字血液センター所長）
入 田 和 男（日本赤十字社九州ブロック血液センター所長）
松 崎 浩 史（福岡県赤十字血液センター所長）
松 山 博 之（佐賀県赤十字血液センター所長）
中 園 一 郎（長崎県赤十字血液センター所長）
井 清 司（熊本県赤十字血液センター所長）
岡 田 薫（大分県赤十字血液センター所長）
豊 田 清 一（宮崎県赤十字血液センター所長）
榮 鶴 義 人（鹿児島県赤十字血液センター所長）
大久保 和 明（沖縄県赤十字血液センター所長）

日本血液事業学会編集委員会委員

委員長 佐竹正博（日本赤十字社血液事業本部中央血液研究所所長）
委員 高本滋（日本赤十字社北海道ブロック血液センター所長）
清水博（日本赤十字社東北ブロック血液センター所長）
面川進（秋田県赤十字血液センター所長）
中島一格（日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター所長）
浅井隆善（千葉県赤十字血液センター所長）
稻葉頌一（日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター副所長）
高松純樹（日本赤十字社東海北陸ブロック血液センター所長）
塩原信太郎（石川県赤十字血液センター所長）
藤村吉博（日本赤十字社近畿ブロック血液センター所長）
池田和眞（岡山県赤十字血液センター所長）

日本血液事業学会規約

第1条 本学会は日本血液事業学会と称し、事務局は日本赤十字社血液事業本部内に置く。

第2条 本学会は血液事業に関する学術的研究を行うとともに知識と技術の向上を図りもって血液事業の推進発展を期することを目的とする。

第3条 本学会は次の事業を行う。

- (1) 血液事業に関する学術的研究
- (2) 学術研究発表のための総会
- (3) 血液学、輸血学に関する講演会、研修会
- (4) 血液事業に関する出版物の発刊
- (5) その他

第4条 本学会の会員は次の者とする。

会員は、本学会が主催する事業に参加し、また学会誌に学術発表をすることができる。

- (1) 日本赤十字社血液センター（日本赤十字社血液事業本部中央血液研究所、血液事業本部の職員を含む。以下「血液センター」という）の職員（A会員）
- (2) 日本赤十字社の本部、支部、病産院、その他施設職員または日本赤十字社以外の者で血液事業に関心を持ち、日本血液事業学会規約を遵守し入会を希望した者（B会員）
- (3) 本会には役員の推薦および評議員会の承認を得て、名誉会員をおくことができる。

第5条 本学会に次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 常任幹事 1名
- (3) 幹事 若干名
- (4) 会計監事 2名

第6条 役員の任務は次のとおりとする。

- (1) 会長は本学会を代表し、会務を総括する。
- (2) 常任幹事は会長を補佐し、会長に事故ある時は業務を代行する。
- (3) 幹事は会長が予め委任した会務を執行する。
- (4) 会計監事は決算を監査し、会計帳簿、現金、物品等を検査する。

第7条 本学会に評議員を置く。

2. 評議員の定数は血液センター数とする。

3. 評議員は第9条に定める評議員により構成する。

4. 評議員会においては次に掲げる事項を議決する。ただし評議員会が軽微と認めた事項はこの限りでない。

- (1) 収支予算
- (2) 事業計画
- (3) 収支決算
- (4) 規約の変更
- (5) その他規約で定めた事項

5. 評議員会は評議員の3分の2以上の出席（委任状を含む）をもって成立する。

評議員に事故あるときは、当該評議員の属する血液センターの会員の中から、当該評議員が指名した者を評議員の代理として評議員会における任務を代行させることができる。

6. 評議員会の議決は、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

規約変更の議決は、出席者の3分の2以上の賛成を要するものとする。

7. 会長は、特別の事情があるときは、評議員会を招集しないで評議員に議案を送付し、文書をもって賛否の意見を徵し会議に代えることができる。

8. 評議員会の議長は、会長がこれにあたるものとする。

第8条 役員及び評議員の選出は次による。

(1) 会長は評議員会においてこれを決定する。

(2) 常任幹事は日本赤十字社血液事業本部副本部長（経営企画部長兼務）とし、会長が委嘱する。

(3) 幹事及び会計監事は評議員会の同意を得て会長が委嘱する。

(4) 評議員は各血液センターごとに1名とし、所長または所長の指名した者とする。

第9条 役員及び評議員の任期は2年とし再任を妨げない。

2. 役員及び評議員に欠員が生じた場合、後任者の任期は前任者の在任期間とする。

- 第10条 総会は年1回とし会長が召集する。
2. 臨時総会、役員会、評議員会は会長が必要に応じ招集するものとする。
 3. 総会の開催に当っては会長が評議員会にはかって総会長を委嘱する。
- 第11条 本学会の経費は会費および日本赤十字社の支出金その他寄附金をもってこれにあたるものとする。
- 第12条 会費の額は別に定める。
- 第13条 本学会の会計年度は、毎年4月1日より翌年3月31日までとする。
- 第14条 総会において発表された研究内容、その他会務については機関誌上において掲載するものとする。
- 第15条 この規約に定めるもののほか、本学会の運営に関する必要な事項は、評議員会の議決

を経て定めることができる。

(附 則)

この規約は昭和52年7月19日より施行する。

改正 昭和54年4月

昭和46年11月

昭和60年8月

平成3年9月

平成14年9月

平成16年11月

平成19年6月1日

(適用は平成19年4月1日)

平成24年10月16日

平成26年4月1日

平成27年10月4日

平成28年5月6日

細 則

日本血液事業学会名誉会員

- 第1条 日本血液事業学会規約第4条(3)に定める名誉会員候補者は、次の基準によるものとする。
- (1) 過去に総会長経験者であること。
 - (2) 学会運営に特に顕著な功労があった者。
- 第2条 名誉会員は、評議員会に出席し、本学会に対して助言することができる。ただし、議決権を有しない。
- 第3条 名誉会員が学術研究発表のための総会に参加する場合、参加費および会員交見会費を免除する。
- 第4条 名誉会員は、年会費を免除する。また学会誌を贈呈する。

(附 則)

この細則は平成14年9月10日より施行する。

改正 平成27年10月4日

日本血液事業学会編集委員会運営要綱

第1条 目的

日本血液事業学会規約第3条4号の規定に基づき、血液事業に関する出版物その他の発刊に当たり、編集内容の諸案件を検討するため編集委員会を設けるものとする。

第2条 構成

委員会に次の委員を置く。

1. 委員長 1名
2. 編集委員 15名程度
3. 査読委員 若干名

第3条 任務

委員の任務は次のとおりとする。

1. 委員長は委員会を代表し、会務を統括する。
2. 編集委員は出版物の刊行に関し、その編集内容について意見を述べ、また投稿論文に対する査読委員の意見が異なる場合は、その意見を調整するものとする。
3. 査読委員は投稿された論文を査読審査するものとする。
4. 編集委員は査読委員を兼ねるものとする。
5. 委員長は査読に当たっては、必要に応じ外部の学識者に依頼することができるものとする。

第4条 委員長及び委員の選出

1. 編集委員長は、編集委員の中から会長が委嘱する。
2. 編集委員は、日本血液事業学会役員及び評議員の推薦により会長が委嘱する。
3. 査読委員は編集委員の推薦により、編集委員会で認めた者とする。

第5条 任期

1. 委員長及び委員の任期は2年とし、再任を妨げない。
2. 委員長及び委員に欠員が生じた場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

第6条 会議

編集会議は定期的に開催することとし、委員長が召集するものとする。

この要綱は平成2年9月26日から施行する。

改正 平成5年9月

平成16年9月

平成21年11月

日本血液事業学会入会ならびに 学会誌購読手続きのご案内

入会ならびに学会誌購読手続き

入会ならびに学会誌購読ご希望の方は、お近くの赤十字血液センター、または学会事務局（日本赤十字社血液事業本部内 Tel. (03) 3438 - 1311 (代)）にお申し出ください。

入会資格

A会員 日本赤十字社血液センター（日本赤十字社血液事業本部中央血液研究所、血液事業本部を含む）職員

B会員 日本赤十字社の本部、支部、病院、その他の施設の職員または日本赤十字社以外の者で血液事業に関心を持ち、日本血液事業学会の規約を遵守し入会を希望した者

会 費

A会員 年間6,000円

B会員 年間6,000円

会費の支払い

A会員は一括で銀行にてお支払ください。

B会員は、郵便振替口座をご利用のうえお支払ください。

郵便振替口座 00190 - 7 - 16171

加入者名 日本血液事業学会

払込の際には、払込通知票（郵便局にあります）の裏面通信欄に、所属施設団体名、役職名、連絡電話番号を必ずご記入ください。この通知票に記載された住所に今後の連絡をいたしますので、正確にご記入ください。

学会誌購読

学会誌「血液事業」のみ購読ご希望の方は、前記郵便振替口座に購読料（1冊1,000円または年間4,000円）をお払い込みください。払い込みの確認後、学会誌をお送りします。特に年間購読ご希望の方は、何巻何号から購読かを振込通知票の裏面通信欄にご記入ください。その際所属施設団体名、役職名、連絡電話番号も併せてご記入ください。

改正 昭和63年9月

平成26年4月1日

平成27年10月4日

バックナンバーをどうぞ

最近刊行のものについては在庫が若干あります。お問い合わせください。

購読ご希望（購読料 1冊1,000円）の方は、郵便振替（00190 - 7 - 16171 加入者名 日本血液事業学会）をご利用ください。

投稿用

論文申込書

「血液事業」(Vol. No.)							
題名							
名	(英文)						
	本文 枚	写真 (紙)	(カラーF) (白黒 F) (焼)	枚	図 枚	表 枚	CD-R FD その他 枚
氏名	(ローマ字)						
所属	(英文)						
役職							
機関誌 (別冊) 送付先	〒						
連絡先	〒 Mail Address @ Tel () —						
別冊	有料 部申込 (50部単位)						

論文申込にあたってのお願い

- 論文のお申し込みに際しては、投稿規定（機関誌に掲載）をごらんください。特に論文の書き方は、投稿規定に従ってください。
- 原稿は原則としてお返しいたしませんので、必ずコピーをお取りください。
- 原稿にこの論文申込書を必ず添えて、学会事務局にお送りください。
- 別冊を20部無料進呈いたします。それ以外で有料購入を希望される方は50部単位でお申し込みください。

日本血液事業学会

事務局 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3

日本赤十字社血液事業本部内

TEL (03) 3438-1311

学術論文作成の手引き

日本血液事業学会編集委員会

この手引きは、学術論文を初めて書く人や書き慣れていない人を対象として作成した。専門の研究者ではない血液事業の日常業務に従事する人にとって、学術論文を書くことは不慣れな点が多いと推察される。そのような人に論文作成のルールや手法を理解してもらえば、論文作成がより身近なものになり、本学会誌への投稿も増加すると期待される。また、血液事業に従事する職員が何らかの研究活動にかかりわり、その研究成果を論文の形にして公表することは、血液事業に貢献するのみならず、本人の業績にもなり、またその経験は自信となって、個人の成長に寄与する。特に、血液事業学会総会において発表した研究は、できるだけ学術論文として投稿することが望ましい。また、指導的な立場にある共著者は、本手引きを参考にして、著者の論文作成に協力していただきたい。

学術論文の主体は原著論文である。原著とは、それまでに知られていない新しいことを含む論文である。原著論文では、通常、緒言、研究対象(材料)と方法、結果、考察、謝辞、文献、図表の順に整理して記述する。別に抄録(要旨)として、論文の全体像が理解できるような概要を最初に添付する。報告についてもこの様式に準じた書き方が求められる。

論文を書く目的は、自分の行った研究成果を広く世に問い合わせ、評価を受けることである。論文として公表されることは、知的財産として記録され、著者の学問的業績となる。個別の論文作成上重要なことは、学術論文を書く目的をはっきりさせ、十分なエビデンスに基づき、社会に役立つ情報を提供できるように記述することである。また、投稿規定を順守し、文章は簡潔明瞭で、独りよがりの表現にならぬようにならなければならない。

以下に論文の書き方の基本的なルールを項目ごとに説明する。

1. タイトル

何を伝えたいかがひと目でわかるようなタイトルをつける。タイトルが長い場合は、「○○センターにおける採血従事者の手袋着用一献血者ごと交換へのプロセス」のように、主題と副題に分けて表記してもよい。論文の中身が伝わるような具体的な表現で、たとえば、「末梢血を用いたヘモグロビン値測定は1滴目で可能である」のように、読者の関心を惹くようなものが望ましい。「・・・の研究」とか「・・・の効果について」等の表現は、無難ではあるが具体的な中身が伝わりにくい。

2. 著者と所属

著者、共著者の氏名と所属施設を記載する。共著者は原則として当該研究に寄与した者とする。共著者が複数施設にまたがる場合は、最初に著者名、共著者名を肩番号1), 2), 3) 等を付して記載し、所属施設名を番号順にまとめて記載する。

3. 抄録(要旨)

研究の背景、目的、方法、結果、結論の順に、簡潔に記述する。重要な数値は記載しておくのが望ましい。要旨のみに目を通す読者も多いので、これだけで論文の全体が把握できるようにするべきである。和文抄録に加えて英文の抄録をつけることができる。本論文を検索するために、適切なキーワードを文章中から選び、英語で記載する。

4. 緒 言

緒言には、当該研究の背景や目的を述べ、あるいは仮説を提示する。

5. 対象および方法

研究方法が一般的に行われる周知のものである場合は、簡単な記載でよいが、著者が開発した独自の研究方法や調査方法を用いた場合は、興味を持った読者が追試(再現)できるように、対象(材料)、機器、試薬、操作法等の詳細を具体的に記載する必要がある。また、データ解析に用いられた統計手法を明記する。

献血者や患者に関わる情報に関しては、投稿規定の執筆要領10)を参考にし、個人が特定されないように記述について十分に配慮をする。さらに、倫理委員会の承認を必要とする研究については、その承認が得られていることを記載する。

6. 結 果

研究の結果のみを主観を交えずに記載する。項目立てをして記述し、主要な結果は図・表にまとめると理解しやすい。

7. 考 察

緒言で述べた仮説を再度提示して、その仮説をどのように証明しどのように結論に至ったかを記述する。結果の繰り返しにならぬように注意し、得られた結果以上のこととを主張しない。関連する先行研究を必要に応じて紹介し、文献を引用する場合は、その内容を主観が入らぬよう正確に記載する。考察の中に明確に結論を記載する。

8. 謝 辞

共著者以外の人から研究や論文作成に協力を得た場合は、謝辞に協力者名、所属、協力内容を記載する。

9. 文 献

本論文で参考にした主要な論文を挙げ、引用順に記載する。書き方は学会誌の投稿規定に従う。学会発表の抄録を引用することは避けることが望ましい。

10. 図・表について

図・表には、それぞれ図1、図2、表1、表2のように番号を付ける。最初に、図の説明文(Figure legends)の頁を設けて、各図の番号およびタイトルと、必要であれば簡潔な説明文をつける。続いて各図および表ごとにそれぞれ1頁を当てて記載する。表の説明文は、各表の下に挿入する。図は印刷することを考えて単色(黒)で描く方が良い。また、写真は図に含める。

11. 文体、用語、字体、表記、等について

- ・文体は文章語(書き言葉)とし、「である。」調に統一する。「です。」「ます。」調は使わない。「患者さま」や「献血していただく」のような敬語表現は不要である。
- ・用語を統一する。平成25年、平成25、H25年、等の混在は不適切。
- ・字体を統一する。2013年、2013年、等の混在は不適切。
- ・細菌名および遺伝子名はイタリック体(斜体文字)で表記する。

- ・ひらがな書きをする副詞と接続詞の例
なお(×尚), まず(×先ず), なぜ(×何故), もちろん(×勿論), すなわち(×即ち), また(×又), ゆえに(×故に), したがって(×従って)

12. 文章の書き方の参考

明快で簡潔な文章を書くために以下の点を心がける。

- ・センテンスをできるだけ短くする。
- ・きちんと句読点を入れて、何通りもの意味に解釈できるような文章を書かない。
- ・曖昧な表現をしない。日本語の受身形は表現が柔らかくなるが、意味は多少あいまいになる。「～と思われた」、「～と考えられる」、「～ではないかと思われる」のような表現より、「～である」、「～だと思う」、「～だと考える」のように、はっきり言い切る方がよい。
- ・「約」、「ほぼ」、「ぐらい」、「程度」、「たぶん」、「らしい」のようなぼかし言葉は最小限にする。

13. 論文執筆の参考となる「血液事業」掲載論文例

採血業務

- [原著] 初回高校生における血管迷走神経反応(VVR)抑制への試み 35(4), 639-642, 2013.
[原著] 無侵襲非観血型ヘモグロビン測定装置の精度の検討 35(1), 15-19, 2012.
[原著] 全血採血針の針長に関する検討 34(3), 511-515, 2011.

輸血副作用・検査・製剤業務

- [原著] まれな血小板特異抗体に起因したと考えられる血小板輸血不応答例 35(1), 9-13, 2012.
[原著] 血小板製剤の外観検査の重要性について 34(3), 505-510, 2011.
[報告] 濃厚血小板の単位に影響を与える血小板濃度測定工程の検証 35(1), 57-63, 2012.

献血推進業務

- [報告] 複数回献血クラブ会員増強への取り組みについて—サイト誘導装置の導入効果— 35(1), 65-68, 2012.
[報告] 献血啓発としての学校出前講座の実践とその意義 34(4), 605-611, 2012.
[報告] 献血協力団体への献血情報提供による効果的な献血受け入れの試み 34(3), 537-539, 2011.

供給業務

- [報告] 京都府における1単位赤血球製剤の受注と供給状況
—1単位製剤の必要本数と安定供給への課題— 34(4), 599-604, 2012.
[報告] 沖縄県におけるABO不適合血小板製剤の供給状況について 34(3), 533-536, 2011.
[報告] 緊急供給の適切な要請促進への取り組み 33(3), 329-334, 2010.

血液事業投稿規定

内 容 本誌は、血液事業に貢献する論文と、血液事業に関する情報、学会会員のための会報・学会諸規定等を掲載する。

原稿の種類は、総説、原著、報告、速報、編集室への手紙、その他とする。『原著』は新知見を含んでいることを条件とし、「報告」は新知見にこだわらず、実態調査など血液事業の実務に資する客観的情報が含まれているものとする。また、「編集室への手紙」では掲載論文、その他の血液事業に関する意見を掲載する。

投稿資格 本誌への投稿者は、本会会員に限る。ただし共著の場合は、共著者の過半数以上の者が本会会員であることを必要とする。

論文の受理 論文原稿は、事務局あて送付する。編集委員長は受付年月日を論文原稿に明記のうえ受理し、提出者には受付年月日を記した原稿受領書を交付する。

論文の掲載

- 1) 原稿掲載の採否は、査読結果にしたがって編集委員会が決定する。査読用に図表を含めて論文のコピー2部を添付すること。
- 2) 一般原稿の掲載は、完全な稿の受け順に掲載することを原則とし、編集上の都合によって若干変更することがある。
- 3) 他誌に既発表あるいは投稿中の論文は掲載しない。
- 4) 本誌に掲載された全ての資料の著作権は、日本血液事業学会に帰属するものとする。

執筆要領

- 1) 原稿はA4版の用紙を用い、頁を必らず記入し、第1頁には、和文の表題、著者名、所属、ついで英文の表題、著者名、所属を記入する。
- 2) 原稿第2頁以下は、抄録(400字以内)、キーワード(英語で4個以内)、本文、文献の順に配列する。また、英文抄録(300語以内)を付けることもできる。
- 3) 論文の長さの制限:

文字数(文献不含)	写真・図・表
総説 8000字以内	10個以内
原著 6000字以内	10個以内
報告 4000字以内	5個以内
速報 1600字以内	2個以内
編集室への手紙 1600字以内	2個以内
本文400字詰原稿は本誌1頁に概ね4,5枚入る。	

図表の大きさとそのスペースについては本誌既刊号を参照のこと。

- 4) 原稿は、口語体、常用漢字、新仮名づかい、平仮名交じり、楷書とする。原則としてワープロを使用し、A4版の白紙に横書きで字間・行間を十分にあけ、一枚当たり400字(20字×20行)とする。

- 5) 文中の英語は、英文小文字とする。ただし、文頭および固有名詞は大文字で書き始めること。独語は独文法に従うこと。いずれの場合も欧文はタイプまたはブロック書体で書くこと。

- 6) 数字はアラビア数字を用い、度量衡の単位はm, cm, mm, μm : L, mL, μL , fL: g, mg, μg , ng, pg, fg, N/ $\sqrt{10}$ などを用いる。

- 7) 図表: 簡潔明快を旨とし、内容が本文と重複するのを避ける。図(写真を含む)および表は引用順にそれぞれ番号を付け、挿入箇所は本文中および欄外に明記する。図表には必ず表題をつける。その大きさはA4版を越えないこと、図はそのまま製版できるように墨入れする。

- 8) 文献: 本文に引用した順序に番号を付け配列する。文献の記載法は著者名(著者が3名以上の場合は筆頭者名のみを記し、共著者名は省略して“ほか”または“et al.”とする): 論文題名、雑誌名(略号は医学中央雑誌またはIndex Medicusに準拠する), 卷: 頁~頁、年号の順とし、単行本の場合は著者名: 題名、書名、編集者名、版数、頁~頁、発行書店、発行地、年号

の順とする。

- 9) 論文中にたびたび繰り返される語は、略語を用いてよいが、最初のときは、正式の語を用い(以下……と略す)と記載してその旨を断ること。
- 10) 献血者や患者のプライバシー保護に配慮し、献血者や患者が特定されないよう以下の項目について留意しなければならない。
 1. 献血者や患者個人が特定可能な氏名、採血番号、製造番号、入院番号、イニシャルまたは「呼び名」は記載しない。
 2. 献血者や患者の住所は記載しない。ただし、副作用や疾患の発生場所が病態等に関与する場合は区域までに限定して記載することとする。(神奈川県、横浜市など)
 3. 日付は、臨床経過を知る上で必要となることが多いので、個人が特定できないと判断される場合は記載してよい。
 4. 他の情報と診療科名を照合することにより患者が特定され得る場合は、診療科名は記載しない。
 5. すでに他院などで診断・治療を受けている場合、その施設名ならびに住所地を記載しない。ただし、救急医療などで搬送もとの記載が不可欠の場合はこの限りではない。
 6. 顔写真を掲示する際は目を隠す。眼疾患の場合は、顔全体が分からぬよう眼球のみの拡大写真とする。
 7. 症例を特定できる生検、剖検、画像情報に含まれる番号などは削除する。
 8. 以上の配慮をしても個人が特定できる可能性がある場合は、発表に関する同意を献血者や患者自身(または遺族か代理人、小児では保護者)から得る。
 9. 遺伝性疾患やヒトゲノム・遺伝子解析を伴う症例では、「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」(文部科学省、厚生労働省及び経済産業省: 平成13年3月29日、平成16年12月28日全部改正、平成17年6月29日一部改正、平成20年12月1日一部改正)による規定を遵守する。
 10. 疫学研究では、「疫学研究に関する倫理指針」(平成14年6月17日、平成19年8月16日全部改正、平成20年12月1日一部改正)による規定を遵守する。
 11. 臨床研究では、「臨床研究に関する倫理指針」(平成15年7月30日、平成20年7月31日全部改正、平成20年厚生労働省告示第415号平成21年4月1日より施行)による規定を遵守する。

※9~11の詳細は、厚生労働省のホームページ「研究に関する指針について」を参照のこと。

データ MS WORDもしくはテキスト形式の文字データがある場合は論文のハードコピーに同封して送付する。

校 正 校正は再校まで著者に依頼する。校正はすみやかに完了し、組版面積に影響を与えないよう留意する。

印刷費

- 1) 投稿論文の掲載料は無料とし、別冊20部を贈呈する。著者の希望により別冊20部以上を必要とする場合は50部単位で作成し、その費用は著者の負担とする。カラー写真掲載・アート紙希望などの場合は、著者の実費負担とする。
- 2) 総会特別講演およびシンポジウム抄録の別冊を必要とする場合は著者の負担とし、前記により取り扱う。ただし、総会一般講演の別冊は作成しない。

平成19年10月3日一部改訂
平成24年10月16日一部改訂

原稿送付先 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社血液事業本部内
日本血液事業学会事務局